

# PAPER SKY

A DIFFERENT WAY TO TRAVEL



## Landscape Art



佐々木愛さんとスイスの風景のなかへ  
画家が描いたアルプスの景色に出会う旅





「カラマツの山にかかる橋」 Red Pines & Mt. Bridge | Ode to Ernst Ludwig Kirchner

### 画家たちの魂を揺さぶった、スイスの風景を訪ねて

This issue pulls you into Swiss Landscape paintings. We choose six painters: Ferdinand Hodler, Paul Klee, Félix Vallotton, Alois Carigiet, Ernst Ludwig Kirchner and Giovanni Segantini. And then we selected one painting from each painter. Then we traveled to Switzerland to visit the location of each painting.

それは6枚の風景画から始まった。フィルディナント・ホドラー、パウル・クレー、フェリックス・ヴァロットン、エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー、アロイス・カリジェ、ジョヴァンニ・セガンティーニ。6人の画家が描いたスイスの風景画をもとに、実際に描かれた場所を探そうという試み。いずれも19世紀末ごろから20世紀中頃にかけて活躍した画家および芸術家だが、全員がスイス人ではないし、生涯を過ごしたわけでもない。出自も暮らした場所もさまざまだが、共通しているのはスイスの自然の風景に魅せられ、独創的な作品を残したということだ。

ご存知のとおり、スイスは大自然を満喫できるパラダイスである。九州ほどの大きさの国土に、4,000m級の山々がそびえ立ち、麓にはミラーレイクと呼ばれる鏡のような湖が佇む。清澄な空気ゆえに、木々の緑や水の色はいつでも鮮やかに目に映る。“光、風、雲”といった自然の産物が、目の前の風景より多彩で魅力溢れるものにしてくれる。

アイガー、メンヒ、ユングフラウの三名山を見に、山岳鉄道で標高2,000m付近のシーニゲブラッテ駅を訪れたときのこと。厚い雲が覆っていて、何も見えないと諦めていたのだが、風が吹き始めると30分もしないうちに雲はみるみる流れ、光が差し込み、山の稜線がくっきりと現れた。そうかと思うと、また風に乗って、黒い雲が立ち込める。同時に山や水辺の景色もまた変わる。短時間でさまざまに自然界の表情は変化するのだ。

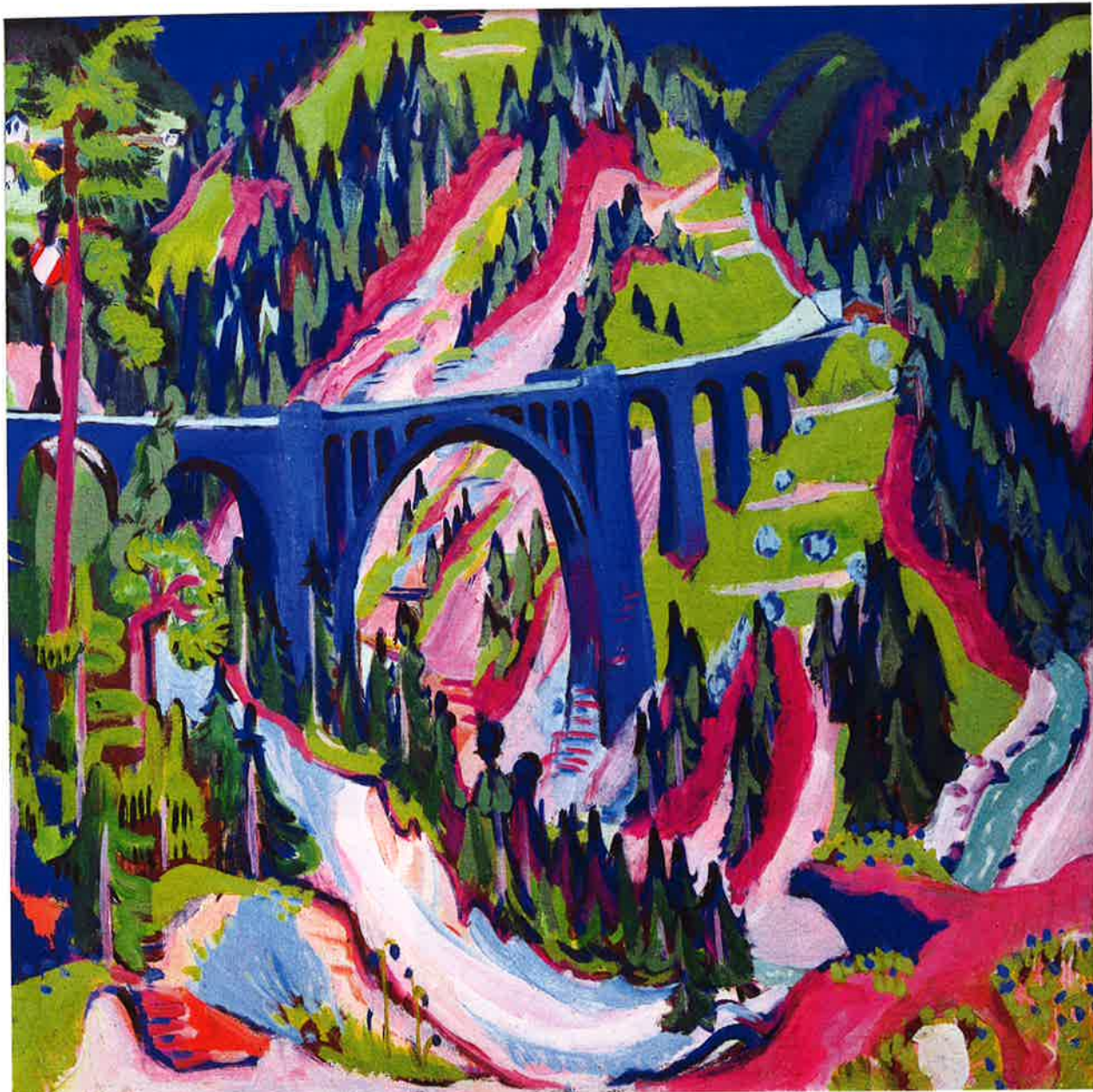
スイスを旅して感じるのは、自然との距離の近さ。スイス人のなかには自然が生活の一部としてあるので、バカンスだからといって「どこかに行かなくては」という気負いはない。レマン湖の湖畔にあるホテルでは、隣部屋の老夫婦が、湖を眺めながら一日中テラスで過ごしていた。サンモリッツのホテルでは、部屋にデイパックが置いてあり、周辺を散策してください、という宿側の心配りがあっ

た。ホテルでゆっくり滞在したり、近場をハイキングしたり。贅沢するわけではなく、日常の延長で自然を楽しむのがスイス流。ホテルは泊まる場所ではなく過ごす場所なのだ、スイスでの滞在はそんなことを教えてくれた。

一方で、自然を存分に楽しむためのインフラが整備されているのもこの国のスゴイところ。登山鉄道がつくられたのはなんと100年以上前。数千メートル級の山々を走り抜け、山の上まで私たちを運んでくれる。だから、本格的な登山装備がなくても、手ぶらで景色を見に行くことだって、もちろんできる。かつて山の上で余暇を過ごすことは上流階級の優雅なレジャーでもあった（ご婦人はなんとドレスで登っていた!）。そんな名残もあり、山岳ホテルは日本でいう山小屋とはまったく違う趣で、サービスと環境が整った立派な宿なのだ。そして、なんといっても雲の上から眺めるダイナミックな眺望はここに来ないと味わえない。取材に訪れた6月の初めは、日没が21時ごろと遅く、ディナーの終わるころようやく日が暮れ始めた。山岳ホテルのレストランから見える夕陽は向かいの山肌に残る氷河をオレンジ色に染め、茜色から群青色へと美しいグラデーションの空をつくり上げた。下界には灯りの灯ったジオラマのような家々が見える。山と山の間から月が顔を覗かせると、手が届きそうな距離で微笑んでいる。たとえばこんな幻想的な光景と出会ったときに、画家は絵を描きたくなるのかと、ふと思う。

さて、6人の画家たちは——。彼らはスイスの自然にイマジネーションを喚起された。心が揺さぶられたから描いた。そういう意味で、風景画は「直球」だ。捻りや銜いはなく、心に響いたままの素直な感動が象徴的に、あるいはダイレクトに表現されることが多いからだ。画家たちの心の機微に触れ、風景画と実際の景色を重ねて見ると合点がいく。百聞は一見にしかず。景色を体感する旅は、想像以上に胸に迫るものがあった。

all paintings are done using acrylic on canvas



「Bridge at Wiesen」1926

## Ernst Ludwig Kirchner | Davos

鮮やかな色彩で、ダヴォスの強い光を表現

Ernst Ludwig Kirchner's paintings become more modern the older they get. Kirchner's style shines in this painting of the "Bridge at Wiesen" (1926) showing his energy for colors and ability to infuse the sun into his paints. After WW1 he lived and painted in Davos for 20 years.



スイスの光に魅せられた外国人画家は多い。ドイツ表現主義を代表するエルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナーもそのひとり。ドイツに生まれた彼は仲間たちと前衛運動ブリュッケを結成し、伝統的なスタイルを避け、新しい芸術表現を確立しようと試みた。1914年、第一次世界大戦に従軍するもほどなく神経を病み、除隊。1917年に友人の勧めで、グラウビュンデン州のダヴォスに移り住むことになった。すると、穏やかな環境が合ったのか、急速に回復に向かった。ダヴォスに来てから風景画を描くことが多くなっ



01

エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー  
／Ernst Ludwig Kirchner

1880年、ドイツ・バイエルン州生まれ。ドイツにて前衛芸術画家として活躍後、1917年にダヴォスに移住。独特のタッチでスイスの景色を描いた。1938年没。

「Bridge at Wiesen」1926  
Oil on canvas, 119 x 120cm  
Kirchner Museum Davos

Kirchner Museum Davos  
Promenade 82, 7270 Davos Platz  
TEL: 081 410 63 03  
www.kirchnermuseum.ch

Schneider's (cafe & restaurant)  
Promenade 68, 7270 Davos Platz  
TEL: 081 420 00 00  
www.schneiders-davos.ch

Hotel Schatzalp (P46)  
Bobbahnstrasse 23, 7270 Davos Platz  
TEL: 081 415 51 51  
www.schatzalp.ch



02



03



04



05

01/「ヴィーゼン近くの橋」が描かれた場所から眺める。110年ほど前に作られた高架橋は全長210m、高さ88.9mと圧巻のスケール 02/キルヒナーがダヴォスに滞在してちょうど100年、キルヒナーミュージアムでは劇場画家としても活躍した彼の作品を展示 03/トーマス・マンの『魔の山』の舞台となった「Hotel Schatzalp」 04/キルヒナーも通ったというカフェ「Schneider's」。このカフェの風景を描いた作品もある 05/シャッツアルプの展望台にあるレストラン

たキルヒナーは、山小屋のアトリエでアルプスの自然の風景や農民の暮らしからインスピレーションを受けたという。

有名な作品のひとつ『ヴィーゼン近くの橋』で描かれた場所に足を運んでみると、実際に彼が見た(であろう)場所は、付近がハイキングコースになっているのでほぼ同じ構図で眺めることができた。キルヒナーの真骨頂はなんといっても大胆な色使い。その風景画は原色系の強い色彩で表現されることが多く、作品にもこれぞキルヒナーカラーというような紫やピンクが印象的に使われている。同じ場所から

眺めていると、彼のイマージネーションにダヴォスの光が大きく影響していることに気がつく。実際に陽の光は強く、澄みきった空気も相まって、まるでエフェクトがかかったように山の緑や空の青に鮮やかさを増幅させる。抜けるような青空のもと、山々を眺めると木々の間から覗く山肌はピンク色に、光が反射した枝葉は薄い赤紫色に見えた。ダヴォスの強く美しい光を捉えて表現したキルヒナーが、この土地に惹かれ、風景画を描くようになった理由が、ここに来ればよくわかる。



## Hotel Schatzalp

(P.38-39)

美しいアールヌーヴォー様式の建造物で、1900年にこのホテルが建てられて以来、今もそのクラシックな雰囲気を守っている。もともとここは、高級なサナトリウム（療養所）として建てられたのだが、医療技術などの発達にともない、山岳ホテルとして姿を変えることになった。すべての客室は南向きに設計され、かつて患者がそうしていたように、宿泊客はベランダに出て太陽の光をたっぷり浴びられる。アルプスの山々を眺めながら新鮮な空気を満喫したら、ダヴォスで暮らした画家、エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナーの作品を所有する、キルヒナー美術館に足を伸ばしてみるは？ ケーブルカーでシャッツアルプから麓駅で降りると、キルヒナーも通ったというカフェもある。

Hotel Schatzalp  
7270 Davos Platz  
TEL: 081 415 51 51  
[www.schatzalp.ch](http://www.schatzalp.ch)



## Grand Hôtel Suisse Majestic

(P.32-33)

Grand Hotel Suisse Majesticは、アーティストのフェルディナント・ホドラーがまさに彼の全盛期に差し掛かりつつあった、1870年に建てられたホテルだ。ホドラーはレマン湖の風景を描くために、頻繁にこの地に足を運んだ。そして、近年ユネスコ世界遺産にも選ばれた、ぶどう栽培が盛んなラヴォー地区へは、たびたび散歩に訪れていたともいわれている。ホテルの客室はどの部屋も湖に面しており、レストラン「45」からの眺望も素晴らしい。レマン湖の湖面に反射する光を眺めながら、ローカルワインを片手に贅沢な食事を楽しめる。7月に滞在するなら、ぜひ部屋の窓を全開にして、モントルー・ジャズ・フェスティバルの豊かで美しい音色に耳を傾けてほしい。

Grand Hôtel Suisse Majestic  
Avenue des Alpes 45, 1820 Montreux  
TEL: 021 966 33 33  
[www.suisse-majestic.ch](http://www.suisse-majestic.ch)

*Contribution*

«PAPERSKY», «Swiss Landscape Art» (Consumers: 75000), Published on: 30.7.2017

*Stay in Switzerland*

2017/06/02 - 2017/06/13 Montreux, Bern, Interlaken, Schynige Platte, Zurich, St. Moritz,

*ST-Representation*

Tokyo

*Clipping No.*

TYOClip\_1530

*Contents (Summary)*

'PAPERSKY' features Switzerland as a mono theme magazine as per ST's theme 'Back to Nature' and invited a Japanese female artist Ms. Ai SASAKI for her to discover the beauty of Swiss landscapes by tracing the art works of Swiss related artists such as Ferdinand Hodler, Giovanni Segantini, Ernst Kirchner, Felix Vallotton, Alois Cariget etc.

She acts as a navigator to report the spots where painted by the above artists for 6 different stories as a travel guide, and paints the sceneries by herself from her impressions through Swiss journey to be presented on 'PAPERSKY' magazine as well as at her exhibition.

Separately from travel guide, the unique approach of arts by the spiritual artist Emma Kunz in Würenlos and Ingo Giezendanner in Zurich, as well as the poster exhibition of 'Take a Holiday' at Zurich Design Museum at the occasion of 100 years of tourism promotion are featured.